〔研究ノート〕

「接触回避尺度」開発の試み

Development of the Contact Avoidance Scale

河野和明*・羽成隆司**・伊藤君男*
Kazuaki KAWANO*, Takashi HANARI** and Kimio ITO*

キーワード：対人嫌悪感，身体的接触，性差
Key words：interpersonal disgust, physical contact, sex difference

要約

いわゆる「生理的嫌悪感」に相当する感情を測定するために、身体的接触に対する拒否をともなう嫌悪感を測定する尺度（8項目）を作成した。回答者には、これまで出会った人の中で最も気持ちの悪い感じがする接触したくない人物を、男女それぞれ1名ずつ想起することを求め、この人物について、作成した尺度による評定を要請した。同時に、その人物に対する6種の感情についての評定および一般的な嫌悪感尺度への回答も求めた。作成した尺度の一因子性は高く、尺度のα係数は想起した男性について.88、想起した女性について.92であった。一般的な嫌悪感尺度および単純な嫌悪感評定とは比較的弱い正の相関を示した。これらの結果から、本尺度は一般的な嫌悪感尺度と異なる心理尺度として一定の水準を満たすものといえる。接触回避の測定の意義が考察された。

Abstract

The contact avoidance scale (CAS) was developed in order to measure the degree of disgust felt for a person, involving avoidance of physical contact. College students were asked to recall actual men and women they felt disgust for, then asked to complete the CAS, evaluation of six emotions on those recalled, and a general disgust scale (Haidt et al., 1994). Unidimensionality of the CAS was confirmed in both disgust-evoking men and women by using factor analysis. Cronbach's α was .88 for men who were disgusted, and .92 for women who were disgusted. The score of the CAS had significantly positive but relatively weak correlations with a general disgust scale and simple evaluation of disgust emotion for the persons who were disgusted. It thus considered that the

＊東海学園大学人文学部人文学科　** 椙山女学園大学文化情報学部

reliability of the contact avoidance scale was confirmed. Implications of measuring contact avoidance were discussed.

対人嫌悪感は、人間の日常的な社会生活や対人ストレスを理解する際に重要な感情と考えられる。好きになれない相手と身近に接しなければならない苦痛は、場合によって非常に大きい。仏教では「憎怨会苦」として嫌いな相手と出会う苦しみを人間の根源的な苦痛である八苦のひとつに数えている（松原, 2009）。

これまで報告された対人嫌悪研究には、対人嫌悪を感じる相手の特徴についての因子分析的検討（斎藤, 2003）がある。そこでは、「自分との相違」「相手への妬み」「相手の傲慢さ」「相手の自己中心性」「相手の主張過剰」「自分との類似」「相手の外見」「相手の話し方」の 8 因子が見いだされている。また、対人嫌悪と類似した概念として対人苦手意識をとりあげた研究（日向野, 1998；2008）によると、苦手な人の態度特徴として、「自己中心性」「うっとうしさ」「感情的な態度」「えらそうな態度」「いいかげんさ」「思いやりのなさ」「魅力・有能さ」「性格・会話の不一致」「内向性」「身体・個人的特徴」「つかみどころのなさ」「態度のうらおもて」「依存性」「陰険さ」「無視・無反応」が指摘されている。

しかし、社会心理学において対人魅力が大きな研究領域となっているのに対し、対人嫌悪感は対人魅力の反対の側面として論じられることが多く、対人嫌悪そのものを中心においた研究は全体的に少ない。

一方、対人嫌悪に限定しない一般的な嫌悪感の個人差は心理尺度を用いて簡便に測定されてきた。中でも、Haidt, McCauley & Rozin（1994）の Disgust Scale は代表的な尺度である。これは、嫌悪感を引き起こす可能性のある 7 種の対象と 1 種の状況から成る下位カテゴリ（Food, Animals, Body products, Sex, Envelope violations, Death, Hygiene, Magic）ごとに 4 項目が設定された尺度であり、その後、Olatunji ら（Olatunji, Cisler, Deacon, Connolly & Lohr, 2007; Olatunji, Williams, Tolin, Abramowitz, Sawchuk, Lohr & Elwood, 2007）によって改訂がなされた。これに対して、Tybur ら（Tybur, Lieberman & Griskevicius, 2009）は、適応論的な観点から嫌悪の内容を「病原体」「性」「道徳」の 3 次元に整理し、各次元における嫌悪感の個人差を測定する尺度を開発した。しかし、これらの尺度はあくまで一般的な嫌悪対象に対する個人の反応の程度を測定するものであり、特定他者に対する強い嫌悪感の測定には適していない。

そこで、本研究では、対人嫌悪感を測定する尺度の開発を試みる。対人嫌悪感を好意度の逆と単純にとらえるなら、これまで開発されてきた愛情や好意度を測定する尺度を用いれば十分である。しかし、ここでは、いわゆる“生理的な嫌悪”、すなわち身体的接触への拒絶を伴うより強い嫌悪（接触回避）を想定する。そして、質問紙法を用いて接触回避を測定するために作成した

項目の妥当性について検討した後、一般的な嫌悪感尺度との関係を明らかにする。さらに、接触回避の程度が、嫌悪対象者の性と回答者の性によってどのように異なるかを分析する。

方法

対象者　東海地方の学生、計 228 名（男性 101 名、女性 127 名）を調査対象とした。平均年齢は 20.56 歳（年齢範囲 18〜43 歳、SD2.27）であった。

接触回避を測定する項目の作成　身体的接触への拒絶感を測定する尺度を作成するために、直接および間接の身体的接触を伴う行動を多数挙げ、その中で、(1)実際の行動として比較的想定しやすく、(2)あからさまに性的接触を目的とする行動を含まず、(3)回答が一方の極端に比較的偏りにくいと考えられるものを選出することによって、8 項目を選定した（表 1）。回答は 7 件法（1；まったく平気〜 7；非常にしたくない）とした。

質問紙　これまで出会った人の中で、「最も生理的な嫌悪を感じる男性（気持ちの悪い感じがする男性、接触したくない男性）」をひとり想起することを求めた（ここで想起した男性を以下、想定男性と呼ぶ）。また、該当する人物がいない場合は、「最も好きになれないと感じる男性や最も好感度が低い男性」とするよう求めた。評定に先立って、想起した人物のイニシアルまたはその人物に関する何らかのキーワードの記入を求め、その後、その人物に対する感情 6 項目（嫌悪感・好感・かわいそう・いたたまれない感じ・優越感・軽蔑）について 7 件法（7；非常に感じる〜 1；まったく感じない）で評定を求めた。さらに、その人物に対する接触回避の程度を前述の 8 項目で尋ねた。続いて、まったく同様に「最も生理的な嫌悪を感じる女性」の想起を求め（同様に以下、想定女性と呼ぶ）、想定男性と同様の評定を求めた。この後に、Haidt et al.（1994）による嫌悪感尺度の和訳項目（32項目）への回答を求めた。質問紙に記名は求めなかった。

結果

項目の因子分析　接触回避を測定する 8 項目に対して回答者の男女ごとに因子分析（主因子法）を行ったところ、男女の因子構造はほぼ同一と考えられた。そこで以下では、男女込みのデータで因子分析を行った。固有値の減衰状況および固有値 1 以上の基準から、強い 1 因子性が示された（説明率：想定男性について 50.0%；想定女性について 60.2%）。各項目に対する因子負荷量を想定男性と想定女性ごとに示す（表 1）。

尺度の α 係数は想定男性について.88、想定女性について.92 であり、高い一貫性を示した。また、当該項目を除いた合計得点に対する各項目の相関係数は想定男性について.47〜.75、想定女性について.54〜.83 であった。G-P 分析を行ったところ、すべての項目に高い弁別力が認められた。α 係数が当該項目除外前より増大する項目が 1 項目［項目(3)］のみ見られたが、除外前後の

差（想定男性について.0039、想定女性について.0026）はきわめて小さかった。これらの結果から、使用した8項目が接触回避尺度として妥当であると判断し、その合計得点を接触回避得点とした。

表1．接触回避を測定する尺度の項目と因子負荷量（主因子法1因子解）

項　目	因子負荷量	
	想定男性	想定女性
(1)じかに箸を入れて同じ鍋料理を食べる	.700	.861
(2)握手する	.758	.802
(3)小さなテーブルで向かい合って話をする	.479	.567
(4)その人が長時間座ったイスに座る	.696	.768
(5)その人がずっと使っていたコップで飲み物を飲む	.787	.849
(6)人工呼吸で自分の口からその人の口に息を吹き込む	.572	.691
(7)その人が入った後のお風呂に入る	.812	.835
(8)その人が使った後の洋式トイレに入って大用を足す	.786	.792

嫌悪感尺度等との相関　接触回避得点は、Haidt, McCauley & Rozin（1994）による嫌悪感尺度の合計得点と中程度の有意な正相関（想定男性について.32；想定女性について.36）を示した。また、想定人物に対する単純な嫌悪感の評定と接触回避尺度には、想定男性について.34、想定女性について.32の有意な正の相関が認められた（いずれも $p<.01$）。嫌悪感尺度の下位尺度と、単純な嫌悪感評定および接触回避尺度得点との相関を示す（表2）。嫌悪感評定は嫌悪感尺度のすべての下位尺度と有意な相関がなかったが、想定男性への接触回避尺度得点は下位尺度Envelope Violationsおよび下位尺度Sexと無相関であり、想定女性への接触回避尺度得点はEnvelope Violationsと無相関であったが、それ以外は有意な正の相関が示された。このことは、接触回避は単純な嫌悪感評定よりも一般的な嫌悪事態の感受性と関係が強いことを示唆している。

表2.　接触回避尺度得点および嫌悪感評定と嫌悪感尺度の下位尺度得点との相関係数

	Food	Animals	Body Products	Sex	Envelope Violations	Death	Hygiene	Magic
想定男性に対する嫌悪感評定	.025	.064	.040	.005	.014	.066	.081	-.025
想定女性に対する嫌悪感評定	.074	.102	.027	.047	-.097	.018	.105	-.011
想定男性に対する接触回避尺度得点	.269**	.225**	.226**	.126	.041	.236**	.260**	.206**
想定女性に対する接触回避尺度得点	.266**	.211**	.173**	.200**	.028	.209**	.305**	.149*

*$p<.05$, **$p<.01$

想定男性・想定女性ごとの接触回避尺度得点と嫌悪感評定との相関係数行列を示す（表３）。嫌悪感評定は想定男性と想定女性で有意な正の相関をもっていた。同様に、接触回避尺度得点は想定男性と女性で有意な正の相関をもっていた。これらは、一方の性の嫌悪的な人物に嫌悪感と接触回避を強く感じる個人が他方の性の嫌悪的人物に対してもこれらを強く感じやすい傾向があることを示唆する。また、想定男性の嫌悪感評定と想定男性の接触回避尺度得点とに有意な正の相関が見られたが、想定男性の嫌悪感評定と想定女性の接触回避尺度得点には有意な相関は見られなかった。同様に想定女性の嫌悪感評定と想定女性の接触回避尺度得点とに有意な正の相関が見られたが、想定女性の嫌悪感評定と想定男性の接触回避尺度得点には有意な相関は見られなかった。

表３．　想定男性・想定女性ごとの接触回避尺度得点と嫌悪感評定との相関係数行列

	1	2	3
1. 想定男性に対する嫌悪感評定			
2. 想定女性に対する嫌悪感評定	.377**		
3. 想定男性に対する接触回避尺度得点	.338*	.119	
4. 想定女性に対する接触回避尺度得点	.071	.323**	.463**

*p<.05, **p<.01

性差の分析　嫌悪感の評定と接触回避得点の平均値を、回答者および想定人物の性別に示す（図１）。

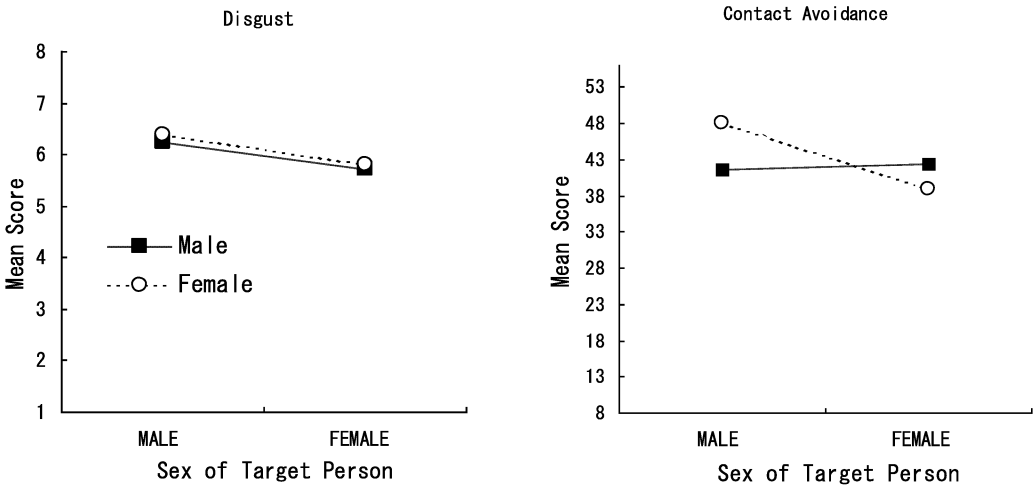

図１．評定者の性と想定人物の性によって示した嫌悪感評定(左)および接触忌避得点(右)の平均値

回答者の性×対象者の性の２要因分散分析を行った。嫌悪感評定については対象人物の性の主効果のみがみられた（$F(1,224)=40.53$, $p<.0001$）が、接触回避得点については交互作用が有意（$F(1,225)=48.88$, $p<.0001$）であり、多重比較（LSD 検定）の結果、想定男性に対する女

性の得点が他のすべての条件より有意に高く、想定女性に対する女性の得点が他のすべての条件より低い傾向にあった。

考察

ここで作成した接触回避尺度は、一因子性および尺度としての一貫性が高かった。また想定男性と女性に対する尺度得点が一般的な嫌悪感尺度得点および対象人物に対する単純な嫌悪感評定と正の相関があり、同時に、相関は中程度であった。これらのことから、本尺度は一般的な嫌悪感尺度と異なる心理尺度として一定の水準を満たすものといえる。

接触回避尺度が嫌悪感尺度の多くの下位尺度との正の相関を示したことは、接触回避尺度が対象人物に対する「気持ちの悪さ」を含む感情的側面を測定していることを示唆している。ただし、嫌悪感尺度の一部、とりわけ下位尺度 Envelope Violation と相関がみられなかった原因は不明であり、今後の検討が必要であろう。

対象人物の性格は好きになれなくとも性的に惹かれるということはあり得るが、接触回避を強く感じる相手、すなわち生理的に嫌いな相手に性的に惹かれることはかなり考えにくい。すなわち、一般に接触回避の機能の一部には性的な回避・防衛があると予想される。したがって、単なる嫌悪感評定と比較して接触回避は、性的防衛をより鋭敏に反映する指標となる可能性がある。接触回避尺度得点は回答者の性と想定人物の性について交互作用を示し、女性は対象者が男性である場合に接触回避をより明確に強め、女性である場合にはより明確に弱めた。このことは、女性が一般的に性的防衛をより強く維持する心理社会的ないし生物学的必然性に起因する可能性がある。一方、単純な嫌悪評定には、対象人物のパーソナリティや社会的立場に対する嫌悪感など、多様な内容の嫌悪が混在しており、測度の解釈において留意が必要と思われる。

以上のように、ここで開発した接触回避尺度は、配偶関係に代表される親密な関係の形成や回避を考察する際に有望である可能性が示唆される。今後は、本尺度の信頼性と妥当性を多様な対象人物について確認するとともに、対人嫌悪感の性差の検討を詳細に行うことが課題となろう。

※本研究の一部は、日本心理学会第74回大会（大阪大学）で発表された。

引用文献

Haidt J, McCauley C, and Rozin P 1994. Individual differences in sensitivity to disgust: A scale sampling seven domains of disgust elicitors. *Personality and Individual Differences*, 16, 701-713.

日向野智子，小口孝司 1998. 青年期の対人関係における苦手意識．昭和女子大学生活心理研究所紀要, 1, 43-62.

日向野智子 2008. 人を苦手になる 加藤司・谷口弘一編「対人関係のダークサイド」北大路書房．pp.76-88.

松原哲明 2009. 暮らしに生きる禅の言葉 PHP 研究所.

Olatunji BO, Cisler JM, Deacon BJ, Connolly K & Lohr JM 2007. The disgust propensity and sensitivity scale-revised: Psychometric properties and specificity in relation to anxiety disorder symptoms. *Journal of Anxiety Disorders*, 21, 918-930.

Olatunji BO, Williams NL, Tolin DF, Abramowitz JS, Sawchuk CN, Lohr JM & Elwood LS 2007. The disgust scale: Item analysis, factor structure, and suggestions for refinement, *Psychological Assessment*, 19, 281-297.

斎藤明子 2003. 対人嫌悪感情に対する社会心理学的研究．九州大学心理学研究．4. 187-194.

Tybur, JM, Lieberman, D & Griskevicius, V 2009. Microbes mating morality: Individual differences in three functionl domains of disgust. *Journal of Personality and Social Psychology*, 97, 103-122.